

英語コーパス学会 Newsletter No. 52

Mar. 8, 2006

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 27 回大会のご案内

英語コーパス学会第 27 回大会は、4 月 22 日(土)に、広島大学東広島キャンパス総合科学部 [〒739-8521 広島市鏡山 1 丁目 7 番 1 号 (<http://www.hiroshima-u.ac.jp/index-j.html>)] で開催されます。会場校の中尾佳行先生、地村彰之先生、前田啓朗先生のご尽力に感謝申し上げます。

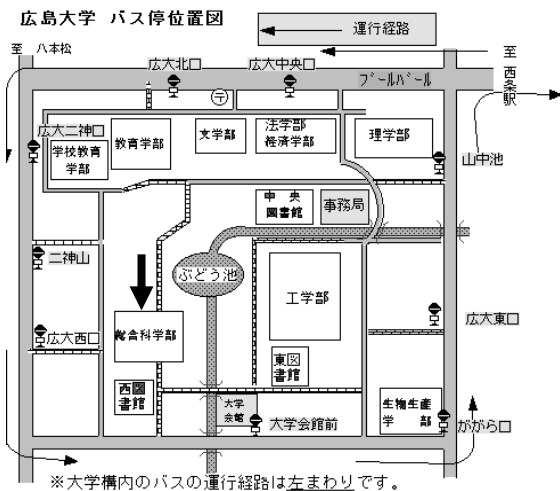
今大会では恒例の午前中のワークショップのほか、研究発表 3 件とシンポジウムを準備いたしました。研究発表につきましては、運営委員会の査読を経て、1 月 29 日(日)に開かれた大会準備委員会での最終審査の結果、阪上辰也、村尾玲美、松野和子(以上名古屋大学大学院生)、森田光宏(山形大学)4 氏の「ライティングにおける産出速度から見た定型表現の検討 動的コーパス構築の試み」、森田順也氏(金城学院大学)の「形態論研究に対する大規模コーパスの有効性 形容詞由来の抽象名詞を例として」、園田勝英氏(北海道大学)の「BNC における *haven't* NP の諸相」の研究発表 3 件が選ばれました。

シンポジウムでは、「文学テキスト分析におけるコーパスの利用」をテーマに採りあげました。小迫勝(岡山大学)、西村道信(大手前大学)、脇本恭子(岡山大学)の 3 氏が講師を務め、それぞれの観点からコーパスを利用した文体論・英文学研究の方向性・可能性について、具体的な研究事例を基にお話になります。ご期待ください。

恒例となっております午前中のワークショップでは、中條清美氏(日本大学)・内山将夫氏(情報通信研究機構)の前のワークショップ「語彙分析入門: lemma リストの作成」を受けて、後藤一章氏(大阪大学大学院生)・石部尚登氏(大阪大学大学院生)に、「品詞タグ付け入門

基礎と実践」と題して、品詞タグ付けとにおける一連の作業が各自で処理できるようになることを主眼においたワークショップを行っていただきます。参加ご希望の方は、あらかじめ事務局宛にメールでお申し込みください。先着 60 名で締め切らせていただきます。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

交通機関・宿泊の詳細につきましては、同封の「会場へのアクセス」「東広島市内の宿泊施設情報」をご覧ください。新幹線東広島駅で下車される方は、土・日はバスが運休しますので、3~4 名でタクシー(1,600 円程度)を利用されることをお勧めいたします。JR 山陽本線西条駅と広島大学東広島キャンパスの間にはバスが運行されています(所要時間約 20 分)。会場(総合科学部)最寄りのバス停は「広大西口」です。時刻表は <http://www.geiyo.co.jp/Unyu/daigaku.htm> をご覧ください。



大会関連のお知らせは以上です。関東方面の会員諸氏にとりましては会場が遠方になりま

すが、有益で充実したプログラムを用意し、会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

続き会員の皆様のご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
大津 智彦(大阪外国語大学)

学会賞応募規定

第5回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は応募期限日において35歳以下の個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 推薦理由書(ホームページより入手可)。
2) 対象となる研究業績の現物またはコピー。

【提出先】事務局

【応募期限】2006年3月31日

【発表】2006年度秋季大会

『英語コーパス研究』第13号について

『英語コーパス研究』第13号(2006)への投稿状況につきましては、前号のニューズレターでお知らせしましたが、その後の進捗状況をお知らせします。ご投稿いただいた研究論文、研究ノート、実践報告、シンポジウム発表原稿を査読させていただき、次号の最終的な構成は以下の通りになりました。

- ・ Rissanen 先生特別寄稿 1 編
- ・ 論文 6 編
- ・ 研究ノート 2 編
- ・ 実践報告 1 編
- ・ シンポジウム発表 4 編

審査委員の先生方には、厳しい時間的制限の中にもかかわらず丁寧に査読作業をお進めいただき、貴重なご助言を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。現在校正段階に入っていますが、4月22日(土)広島大学において開催されます第27回大会での配布に向けて、編集委員一同、最善を尽くしております。引き

新入会員紹介

JAECs Newsletter No. 51(2005年12月1日発行)以降の新入会員の方は次の通りです(2月28日現在、Sは学生、敬称略)。

久井田 直之 日本大学大学院文学研究科英文学専攻 S

白土 淳子 北海道大学大学院国際広報メディア研究科 S

中田 達也 東京大学大学院総合文化研究科 S

仁科 恭徳 神戸市外国語大学大学院 S

森田 順也 金城学院大学文学部

脇本 恭子 岡山大学教育学部

寄贈刊行物の紹介(到着順)

Jimura, A. 2005. *Studies in Chaucer's Words and his narratives*. Hiroshima: Keisuisha.

Iyeiri, Y. (ed.) 2005. *Aspects of English Negation*. Amsterdam: John Benjamins Pub Co.

事務局から

会費納入のお願い

4月22日大会当日の受付は混雑が予想されますので、2006年度会費(一般5,000円、学生3,000円)は同封の払込取扱票を使い4月14日(金)までにお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、高橋薫(〒471-8525 愛知県豊田市栄生町2-1 豊田工業高等専門学校)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

2005年度会費未納の方は、2006年度分と合わせてお納めください(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。会誌『英語コーパス研究』第13号は2005年度の会費を納入していただいた方にのみ配布となります。また、2年続

けて会費未納の場合、*JA ECS Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。

その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありましたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書を紹介、身近なコーパス研究のエピソードなどでも結構ですのでお寄せください。

FORUM

新刊紹介

中村 純作(立命館大学)
jnakamur@gr.ritsumei.ac.jp

本学会の運営委員である広島大学の地村彰之先生が昨年12月に溪水社より *Studies in Chaucer's Words and his Narratives* を出版されました。

本書は地村先生が2002年10月広島大学文学部に提出した博士論文に基づいたもので、Introduction, 第1章“Analysis of Textual Structure,” 第2章“Dialects,” 第3章“Collocations,” 第4章“Grammar,” Conclusion から構成されています。

本書では、まず20世紀後半に出版されたChaucerの言語に関する研究を概観し、その方法論を大きく文学的な研究と言語学的な研究に大別した上で、双方を融合した折衷的な方法論の存在を指摘し、本書をこの範疇に位置付けています。さらに、この方法論をテキスト言語

学的には、文の要素の分析から始め談話分析へ進める伝統的な方法とテキストを伝達行為の場と捉え、話者や聞き手の意図、行為などを含む研究方法の2つに分類し、さらに前者を文の間の文法的、意味論的關係からテキストを分析する microscopic な立場とテキスト全体の構成に関わる制約を扱う macroscopic な立場に分けた上で、本書の立場がこの microscopic な立場であることを述べています。このように綿密に方法論を定義した上で、Chaucerの言語が彼の語りの文体と密接な関係があることから、キーワード、共起語、方言、および文法表現を切り口として、L. D. Bensonのテキストに基づいた分析が行われます。

第1章では“herte (heart),” “soth (true),” “fals (false)”などをキーワードとしてテキストの構造が分析され、第2章ではChaucerの時代に存在したと思われる言語の地域的変種および社会的変種とテキストとの関連が明らかにされます。さらに第3章では形容詞と名詞の共起關係がChaucerの登場人物の描写との関連で取り上げられ、第4章では否定接頭辞“un-,” impersonal constructions, 否定語と否定表現などがテキストの中で如何に有機的に使用されているかが明らかにされています。

古い時代の英語の知識がほとんど無い小生には詳細にわたって本書をレビューすることはとてもその能力のおよぶところではありませんが、Chaucer研究者にとっては是非一読する価値のあるものだと思います。充実した参考文献、系統だった索引にも著者の一貫したChaucer研究への姿勢が読み取れます。ご一読下さい。(B5変形上製263頁 / 定価6,500円 / ISBN 4-87440-903-2)

英語コーパス学会 Newsletter No. 53

June 1, 2006

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 27 回大会報告 概要

英語コーパス学会第 27 回大会は、4 月 22 日(土)、広島大学東広島キャンパス総合科学部の東講義棟で開催されました。肌寒い雨模様の天候にもかかわらず 105 名(会員 83 名、新入会員 6 名、当日会員 16 名)の出席がありました。

午前中のワークショップは「品詞タグ付け入門—基礎と実践—」と題して後藤一章・石部尚登両氏(大阪大学大学院生)に講師を務めていただきました。最初に石部氏による情報付与、品詞タグの意義、品詞タガー、タグセットについて丁寧な説明があり、それを受けて後藤氏に、自ら開発した GoTagger という品詞タガーを使ってタグ付けの実習を行っていただきました。「非常に分かりやすく、有意義でした。このワークショップの為にだけでも広島まで来たかいがありました」のアンケート回答が示すように、入念に準備された内容の濃いワークショップでした。この紙上を借りて若い講師のお二人にお礼申し上げます。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して外国語教育研究センター副センター長の達川奎三先生にご挨拶をいただきました。引き続き、石川慎一郎先生(神戸大学)の司会により年次総会が開かれ、平成 17 年度の決算と平成 18 年度の予算をお認めいただきました。大会にご出席いただけなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。最後に学会賞選考委員会委員長の中尾佳行先生(広島大学)より、学会賞 3 件、奨励賞 2 件の応募があったとの報告がなされました。

引き続き 3 件の研究発表およびシンポジウムが行われました。概要につきましては、司会の先生にご執筆願いました「研究発表」および「シンポジウム」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 46 名の出席がありました。石川有香先生(名古屋工業大学)の司会のもと、会長挨拶の後、三浦省五先生(広島大学名誉教授)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

当初は開催地が関東と関西から離れた広島ということで、例年ほどの参加者が望めないのではないかと心配しておりましたが、事務局の予想を上回る参加がありました。特に地元からの当日会員の参加が多く、広島大学の人脈の広さ、影響力の大きさを実感しました。「スムーズな大会運営で有意義な一日になりました」「宿の一覧を提供していただいたのがとても便利でした」などのアンケートのご回答をいただき、事務局としてホッとしております。これも、開催校である広島大学の中尾佳行先生のもとに、地村彰之先生、前田啓朗先生、柳瀬陽介先生、大学院の学生さんが一丸となって、大会の準備、受付、進行に協力して下さったおかげです。この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

研究発表

ライティングにおける産出速度から見た定型表現の検討 —動的コーパス構築の試み—

阪上 辰也(名古屋大学大学院生)
村尾 玲美(名古屋大学大学院生)
松野 和子(名古屋大学大学院生)
森田 光宏(山形大学)

本発表は、定型表現について従来の「頻度」という基準に、新たに「産出速度」という基準を加え、定型表現の抽出と検討を試みたものである。研究手法として、既存のコーパスでは記録されていない英作文の産出過程を記録した「動的コーパス」の構築を行い、産出過程の量的・質的分析を行った。

被験者は、日本人大学生 26 名で、産出過程のリアルタイム記録システムを用いて、「公共の場での喫煙」というトピックで辞書使用なしで作文(30 分間)をさせた。記録システムによって得られたデータを動的コーパスとみなし、<期待速度(1 ストロークの平均速度×文字数)>と<産出された n-gram 表現の観測速度>との比較を行った。頻度 10 以上であった 7 個の n-gram 表現について比較を行った結果、6 個の表現は、期待速度よりも速く産出される傾向がみられたが、期待速度よりも遅く産出される表現も観察されており、頻度の高い n-gram 表現が、必ずしも定型表現とは言えないことがわかった。

今後の課題として、期待速度よりも遅い表現や速い表現の原因は何か、3-gram 以上の表現について産出速度を計測する必要性、英語の能力や typing 習熟度による被験者のレベル分けの必要性、母語話者との比較の必要性があげられる。

発表後、フロアからは被験者の英語学習歴や、期待速度の測定方法、動的コーパスのシステム構築についての技術的な質問が寄せられた。今後の実りある研究が大いに期待される。

日臺 滋之(東京学芸大学附属世田谷中学校)

形態論研究に対する大規模コーパスの有効性—形容詞由来の抽象名詞を例として—

森田 順也(金城学院大学)

本発表は、生成文法の枠組みにおける形態論研究に、大規模コーパス(BNC)のデータ利用が有効であることを示そうとするものであった。具体的には-ity/-ness タイプ名詞の語形成について、次の点が検討された。①派生語のリスト性：「低頻度であること」が、派生語が語彙部門にリストされず当座用に形成されるための条件であるとするならば、低頻度語、特に、サンプル中に 1 度しか出現しない語を確認する必要がある。そのためには大規模コーパスが不可欠である。②語形成規則の適用可能性：X-ability/X-ableness 二重語は逆引き辞典にもとづくタイプ頻度では大差が見られないが、BNC を検索してみると、X-ability 型が極めて優勢であり、適用可能性にはかなりの差が見られる。③一般的な条件の働きによる余分な語形成規則適用の阻止：X-ity/X-ness 二重語の使用に関わって生じる阻止(blocking)現象の再検討が行われた。BNC から検索された二重語を、(1)一方の

みの使用しか見られないもの、(2)一方の使用が顕著なもの、(3)両者の使用に違いがないものに分類し、その分布状況が grammatical blocking および pragmatic blocking の 2 点から検討された。

フロアからは、出現形の数を比較する際に、有意差の有無を確認する統計処理を施す必要があるのではないか、「低頻度である」という場合、何をもって低頻度とするか定義しておく必要があるのではないか、Google といった検索エンジンを派生語の用例検索に使う可能性等について質問があった。本研究は、言語理論、辞書から得られるデータ、コーパス検索の 3 方向から英語の派生形態論の特質に迫ろうとする、内容の濃いものであった。

五百蔵 高浩(高知女子大学)

BNC における haven't NP の諸相

園田 勝英(北海道大学)

本発表は、現代英語における haven't NP(他動詞 have の助動詞 do を用いない否定文)の使用実態を、BNC を用いることにより、詳細に分析したものである。

まず、Huddleston & Pullum (2002)の⁶He hadn't many friends.の記述を出発点に、haven't NP の使用を方言差として論ずることが可能であるかを検証する。また、その際の調査方法に関して、単に当該構文の形態的特性のみによる検索では不十分であることを説明し、手作業による選別が不可欠であることを述べた。

実際の調査では、男女差・年齢・地理的地域・場面・地と引用等の条件がどの程度当該構文の使用に影響を与えたかを論じ、その結果、「男女差があるとは言えない」、「年齢が低くなるにしたがって、頻度は低くなる」、「地理的に特定の部分に偏るといったことはない」、「インフォーマルな場面に多く出現する」、「引用部分に多い」という傾向を見いだすことができた。また、Huddleston & Pullum (2002)の指摘が BNC の調査では確認されなかったことが述べられた。さらに、目的語名詞の特性に着目すると、抽象的な意味を持つもの及び動詞とイディオム化したものが haven't NP として生起する率が高いとの指摘も行われた。BNC という膨大なコーパスを基礎資料に、常識的記述と見られていた事柄を、記述的に反証している点、コーパ

スを利用した研究として大変価値のあるものと思われる。

フロアからも、引用内における再引用部分の検索方法についての技術的質問や、Have S ...? という疑問文の研究からの示唆的コメント等があり、活発な質疑応答が行われ、発表者の今後の研究に大いにプラスになったものと思う。

保坂 道雄(日本大学)

シンポジウム

文学テキスト分析におけるコーパスの利用

このシンポジウムは、文学テキストを語学的に分析する文体研究とコーパス利用の接点を探ろうとするものであった。各講師は、文学テキストの分析に際して、(1)電子テキストおよびコーパスを利用すると、どのような成果が得られるのか、逆に(2)その利用が難しいところ、を示すことを司会の小迫勝(岡山大学)が述べ、関連する文献を紹介した。

美学的文体論とコーパスの問題点—D. H. Lawrence の文体的特徴とイメージ構築—

西村道信講師(大手前大学)は、ロレンスの *The Captain's Doll* を中心に、精読で得られた“inner click”をキーワードとして、直接的、間接的に関連する語を電子テキストで精査し、蛇のイメージなどの構成を探り、テキストを読み返し、“doll”の意味を確認する過程を発表した。そして、ロレンス文学の分析には、品詞タグと文法タグはあまり意味を持たないが、肉体賛美に関するタグは、イメージ検索の可能性が広がることを示唆した。

質問の「あると思っただけになかったもの」は、ドイツやオーストリーに関するロレンス流の神話的要素であり、「ないと思っただけにあつたもの」は“snake”という語であった。他に“impressiveness”か“frequency”かの質問も頂いた。

Joseph Andrews における伝達部と発話の表出について

脇本恭子講師(岡山大学)は、*Joseph Andrews* とその前後の数篇について、伝達される発話のレベルと伝達部の働きについて、時代の傾向のみならず、Fielding の文体的技巧の一端を発表した。

質問として、伝達動詞の判断基準、“saith”の発音、Corpus Stylistics における質と量の関係な

ど多く頂いたが、中でも「あると思っただけになつたもの、ないと思っただけにあつたもの」については、強意・感情表現の豊かな Pamela に、“feel”とその派生語が意外にも極めて少なかったことを回答した。さらに、今回のテーマである伝達部や話法の観点から付け加えると、当時としては伝達動詞が多様な *Joseph Andrews* や *The Vicar of Wakefield* のみならず、バリエーションが少ない *Robinson Crusoe* にも“swear”のような表情豊かな動詞が使用されていたこと、また、“swear”が間接話法を導くのに使われた所以が迎れたことなどが挙げられる。

Faerie Queene における脚韻語の用法—ラディガンドのエピソードを中心として—

小迫勝講師は、スペンサーの『妖精の女王』に登場するアマゾン女王のエピソードについて、その脚韻語が基準から逸脱する用法を発表した。中でも女性韻に関して、このエピソードの言語的文体的特性を検証した。コーパス利用は、促進韻の検証にも有効であろうが、二重統語法、ことば遊び、脚韻構造の逸脱、句跨りに関しては、その有効性が見出しにくいことを述べた。

「あると思っただけになつたもの」として、いくつかの用法がこのエピソードに限られること、「ないと思っただけにあつたもの」として、女性韻とディスコースとの関連性のパターンの一部が、同時代および中英語期の作品にも見られることを回答した。

小迫 勝(岡山大学)

ハンドアウトのダウンロードサービス

第 27 回大会の研究発表およびシンポジウムのハンドアウトをご希望の会員に、ダウンロードのサービスを行います。期間限定で、このニューズレターお届けより 2 週間(6 月 4 日より 6 月 17 日まで)とします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂(yasuishikawa@hotmail.com)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。

1. ワークショップ：品詞タグ付け入門
2. ライティングにおける産出速度から見た定型表現の検討—動的コーパス構築の試み

3. 形態論研究に対する大規模コーパスの有効性—形容詞由来の抽象名詞を例として

4. BNCにおける *haven't NP* の諸相

5. シンポジウム「文学テキスト分析におけるコーパスの利用」

なお坂上氏のホームページ(<http://sugiera5.gsid.nagoya-u.ac.jp/call/presentation/index.html>)には発表2関係のファイルが公開されています。またワークショップのデータ、プログラムは後藤氏に <http://uluru.lang.osaka-u.ac.jp/~k-goto/Workshop.zip> で公開していただいています。

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

人事に関する決定事項について

大会前日の4月21日午後6時より開かれた運営委員会において人事案件が以下の通り承認されましたので、ご報告申し上げます。

会長

中村純作(立命館大学) 再任

運営委員

新井洋一(中央大学) 再任

岡田毅(東北大学) 再任

大津智彦(大阪外国語大学) 再任

高橋薫(豊田工業高等専門学校) 再任

塚本聡(日本大学) 再任

編集委員長

大津智彦(大阪外国語大学) 退任

塚本聡(日本大学) 新任

編集委員

朝尾幸次郎(立命館大学) 新任

小林多佳子(昭和女子大学) 新任

滝沢直宏(名古屋大学) 新任

学会賞選考委員長

中尾佳行(広島大学) 再任

学会賞選考委員

投野由紀夫(明海大学) 新任

園田勝英(北海道大学) 新任

家入葉子(京都大学) 退任

事務局補佐

高橋薫(豊田工業高等専門学校) 退任

石川保茂(京都外国語短期大学) 新任

名誉会員

会誌第13号にご寄稿いただいた Matti Rissanen 先生と、10ページの案内にありますように8月に立命館大学と日本大学でご講演いただく John Sinclair 先生に名誉会員になっていただくことが了承されました。

会誌『英語コーパス研究』第13号について

ニューズレターとともにお手元に届いた会誌第13号は特別寄稿1本、論文6本、研究ノート2本、実践報告1本、紙上シンポジウム1部を掲載しています。質量ともに大部なものが出来たことを実感して頂いたものと確信しております。今や言語研究に不可欠のコーパス言語学ですが、このような会誌をみても、広範囲かつ高度な活用が実感できるものとなりました。

巻頭を飾る特別寄稿は Rissanen 先生による *lest* の接続詞化について Helsinki Corpus を用いた統語的、意味的に検証したものです。

研究論文は、日本語母語話者の *adverbial connectors* の使用を明らかにした Narita & Sugiura、*-body* または *-one* を含む不定代名詞を対応分析により扱う Kamitani、古英語過去語尾の異形態から *Beowulf* の成立年代を推測する Ichikawa、品詞 *trigrams* 分布により日本語母語話者による科学論文の特徴の抽出を行った田中・藤井・富浦・徳見、BNC を用いて共起語などから *as long as* の語義の定義を確定する Furuta、対応分析の手法により BNC および LOB のテキストジャンルを分類する後藤、の6点から構成されています。

さらに、Google の有用性を検証する廣瀬、Margaret Paston の amanuenses の問題を議論する Ohara の2点の研究ノート、パラレルコーパスを利用した語彙学習の成果についての Chujo, Utiyama & Miura による実践報告、最後に第25回大会シンポジウム「コーパスと英語史研究— Helsinki Corpus 以後」を収録しています。

以上、論文、研究ノートなどいずれも力のもった研究ばかりですので是非お読み下さい。投稿者、査読者、編集委員の協力により刊行することが出来ました。紙面を借りて感謝申し上げます。

最後になりましたが、本号をもちまして大津先生が編集委員長を退任されました。次号より

塚本聡が会誌の編集にあたることとなりました。よろしくお願い致します。

塚本 聡(日本大学)
『英語コーパス研究』編集委員会委員長

会誌『英語コーパス研究』第 14 号について

『英語コーパス研究』第 14 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2006年6月30日(金)

(氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください)

【原稿提出締切】2006年9月30日(土)

(ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙を添付のこと)

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡
TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336
Email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文
英文 70 ストローク×35 行×15 枚以内
和文 35 字×30 行×15 枚以内
(いずれも Abstract(英文)、注、書誌を含む)
2. 研究ノートは 10 枚以下、その他は研究論文の半分以下。

【書式】第 13 号所収の論文を参考にしてください。謝辞等の記載について、変更があります。詳細は学会ホームページ(<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>)でご確認ください。

【採用通知】2006年11月頃

【刊行予定】2007年6月

『英語コーパス研究』編集委員会

第 28 回大会の日程と研究発表募集

2006 年度の秋期大会(第 28 回大会)は 10 月 7 日(土)に北海道大学(JR 札幌駅北口から徒歩 5 分)で開催される運びとなっております。是非、今から出張の予定に組み込んで頂ければ幸いです。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること。

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【提出物】発表要旨を A4 判 25 字×32 行で 3~4 枚以内にまとめ Word、一太郎、PDF ファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切】2006年6月24日(土)必着

【採否決定】2006年7月中旬(予定)

【発表時間】発表 20 分+質疑応答 10 分

学会賞について

奨励賞の選考対象は、「英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた 35 歳以下の学会員個人」となっておりましたが、以下の 2 点の変更を加えましたので、お知らせいたします。

- 論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る。
- 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人を対象とする。

中尾 佳行(広島大学)
学会賞選考委員長

新入会員紹介(5月20日現在、Sは学生)

浅香 佳子 大阪国際大学

馬本 勉 広島県立大学

川口 裕美子 学校法人高田学苑高田中学・高等学校

北本 徹平 大阪大学大学院言語文化研究科 S

熊谷 哲考 富士大学経済学部

鈴木 理恵 法政大学大学院 S
 成田 早苗 聖マリアナ医科大学
 根本 慎 札幌医科大学保健医療学部
 平山 直樹
 土居 峻 名古屋大学大学院国際開発研究科
 国際コミュニケーション専攻 S
 前田 啓明 広島大学外国語教育研究センター
 松浦 加寿子 岡山理科大学非常勤講師
 水民 護 立命館大学大学院言語教育情報研
 究科 S
 横山 彰三 宮崎大学医学部

寄贈刊行物の紹介(到着順)

Yoko Iyeiri ed. (2005) *Aspects of English Negation*,
 Benjamins Publishing Company/ Yushodo Press.

Makimi Kumura-Kano(2006) *Lexical Borrowing
 and its Impact on English*, Hitsuzi Syobo Pub-
 lishing.

大室剛志(研究代表者)『英語における自動詞の
 他動詞化に関する大規模コーパスに基づく生
 成理論的研究』平成 15 年度～17 年度科学研究
 費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書.

太田洋・日臺滋之(2006)『英語が使える中学生
 新しい語彙指導のカタチー学習者コーパスを
 活用して一』明治図書.

Takeshi Okada(2005) “A Corpus-based Study of
 Spelling Errors of Japanese EFL Writers with Ref-
 erence to Errors Occurring in Word-initial and
 Word-final Positions.” Cook, Vivian & Benedtta
 Bassetti (eds.) *Second Language Writing Systems*,
 pp. 164-183. Matutilingual Matters LTD.

マイケル・スタッブズ著 南出康世・石川慎一郎
 監訳(2006)『コーパス語彙意味論一語から句
 へー』研究社.

滝沢直宏(2006)『コーパスで一目瞭然一【品詞
 別】本物の英語はこう使う！一』小学館.

大門正幸・柳朋宏『英語コーパスの初歩』英潮
 社.

2007 年度の大会日程と開催校

第 29 回大会 4 月 28 日(土)同志社大学

第 30 回大会 10 月 立教大学

事務局から

高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)から学
 会会計等を引き継ぎました石川保茂(京都外国

語短期大学)です。至らない点が多々あるかと存
 じますが、ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろ
 しくお願い申し上げます。

会員情報の問い合わせについて

この度、会員名簿を整理するために、会員
 の皆様全員に対して、連絡先などの会員情報
 に関して問い合わせをする文書を同封致して
 おります。情報の変更の有無に拘わらず、会
 員の皆様全員が問い合わせ文書にある項目す
 べてにご記入いただき、6 月末日までに同封の
 返信用封筒にてご返送くださいますよう、お
 願い申し上げます。なお、会員情報に関する
 データは、学会活動・事務遂行以外の目的に
 は使用致しません。

会員名簿につきましては、個人情報保護法
 の施行に伴い、氏名と所属のみを掲載する形
 式で 8 月下旬に発行いたします。

その他

事務局では、シンポジウムやワークショップ
 の企画・アイデアを随時募集しております。
 英語コーパス学会の大会プログラムとしてふ
 さわしい内容のものがありましたら、どしど
 しご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしておりま
 す。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図
 書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード
 等でも結構ですでお寄せください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

高橋メソッドによるプレゼンテーション

阪上 辰也(名古屋大学大学院生)
 sakaue@nagoya-u.jp

筆者は、先の英語コーパス学会第 27 回大会
 で、「高橋メソッド」を用いたプレゼンテーシ
 ョンを行った。筆者の予想以上に「わかりやす
 い」と好評であったので、この手法を詳しく紹
 介したい。

「高橋メソッド」とは、Web アプリケーシ
 ョンの開発者、高橋征義氏によって提案されたプ
 レゼンテーションの手法である。この手法の特

徴は、スライドに、(1)大きな文字で、(2)簡潔に書く、という2点に集約される。

スライド作成にあたり、特別な約束事はない。参考までに、筆者の作成条件を挙げると、一般的なプレゼンテーションソフト (Windows であれば Microsoft 社の PowerPoint、Mac OS であれば Apple Computer 社の Keynote) を使う場合、フォントの大きさは「72 ポイント以上」で、行数は「スライド1枚につき4行以内」に収める、という2つの条件を設定している。筆者は、これら2点を極力守るようにして、プレゼンテーションに必要なキーワードや、主張したい内容(セリフそのもの)のみを、スライド1枚1枚に載せている。長い文章や詳細な情報をスライド1枚に詰め込むのではなく、複数のスライドに「細かく切り分けて載せる」ことがポイントである。

大きな文字で簡潔なスライドを特徴とする「高橋メソッド」を用いる利点として、以下の3点がある。第一に、スライドが、「とても見やすく」なる。会場の後ろに座っている聞き手にも、はっきりと情報を呈示できる。時折、1枚のスライドに、長い文章を何行にも渡って書いたり、記号を多く並べたりするものがあるが、audience-friendly なスライドとは言えない。

第二に、スライドを作成するうちに、「自然と話の流れができる」という利点がある。文字を大きくし、簡潔に書くことで、話の内容が細かく分けられることになる。結果として、細かく分けられたスライドをどうつないでいくか、を強く意識するようになるので、話の流れが自然と生まれ、発表で伝えたいメッセージを明確にすることができるようになる。

最後に、「聞き手の注目を集めることができる」という利点がある。従来のプレゼンテーションは、1枚のスライドに含まれる情報量が多く、スライドを見ながら、発表者の説明を聴くことは、聞き手の負担が大きくなる。一方で、高橋メソッドによるスライドは、文字数が極端に少ないので、聞き手は、一瞬で情報を読み取ることができ、発表者の話す内容にも集中できる。

技術面での利点もある。プレゼンテーションと言えば、先にも挙げた PowerPoint を使うのが常道であるが、高橋メソッドを用いたプレゼンテーションには、PowerPoint は必ずしも必要ではない。具体的には、テキストエディタ

(Windows ならばメモ帳)と HTML の知識(リンクとフォントに関するタグ)があれば、誰でもすぐに、高橋メソッドを実践することができる。また、高橋メソッドを用いたスライドを作成するためのツールが、Web 上でも無料で配布されているので、そちらも利用するとよい。

拙い内容紹介ながら、この高橋メソッドが、「人にやさしい」プレゼンテーションを目指す上での一つの選択肢となれば幸いである。

【参照リンク】

- ・ 高橋メソッド
(<http://www.rubycolor.org/takahashi/>)
- ・ 高橋メソッドなプレゼンツール
(http://la.ma.la/blog/diary_200504080545.htm)
- ・ 第27回大会で使用した筆者作成のスライド
(<http://sugiura5.gsid.nagoya-u.ac.jp/call/presentation/>)

◆ コーパス紹介

西村 秀夫(姫路獨協大学)
nishimur@edu.himeji-du.ac.jp

昨年4月に開催された第25回大会におけるシンポジウム「コーパスと英語史研究—Helsinki Corpus 以後」の序論で、私が「時代や地域を限定したコーパスや、特定のジャンルに絞込んだコーパスの編纂」の具体例として紹介した Corpus of Early English Medical Writing の第1部となる Corpus of Middle English Medical Texts (MEMT)が、Helsinki 大学の Irma Taavitsainen らによって John Benjamins 社より昨年秋に出版されました。

MEMT は約 50 万語のコーパスで、1375 年頃から 1500 年頃の間にかかれた医学論文を収録した本編の他、若干の韻文作品および 1330 年頃にかかれたテキストから成り立っています。収録されたテキストの大部分は、Helsinki Corpus (HC)と同様に Early English Text Society の刊行物などの印刷本に依拠していますが、一部、写本から起こしたものも含まれます。本編のテキストは、取り扱うテーマ・内容によって Surgical texts, Specialized texts, Remedies and *materia medica* の3つのカテゴリーに分類されています。

MEMT は HC の延長線上に位置づけられるコーパスですが、テキストがリッチテキストフ

イル(RTF)形式になっている点で他の Helsinki 系のコーパスと異なります。RTF 形式になったおかげで、HC では+T, +t で置き換えられていた thorn が画面上に Þ, þ と明確に出るようになりましたが、+G, +g で置き換えられていた yogh にはアラビア数字の 3 が充てられています。

MEMT の CD-ROM には専用の検索ソフトである MEMT Presenter (Raymond Hickey 氏開発 Corpus Presenter の簡易版)が同梱されています (Windows2000 以上でのみ使用可能)。コーパスファイルは HTML 形式でも提供されているので (JavaScript Version)、Mac 系のコンピュータであっても画面上でコーパスの中身をブラウズすることは可能です。

MEMT Presenter では、単純な文字列検索の他、語彙リスト、語彙頻度、コロケーションなどが調査可能です。KWIC コンコーダンスも出来ますが、キーワードの前後でソートするといった小回りが利きません。

RTF 形式が採用されたことで、古い英語に特有の、特殊文字の問題は解決され、画面上でも印刷本と同じようにテキストを見ることができるようになりましたが、MEMT Presenter ではこの点がマイナスに働きます。日本語版 Windows 上で動かしていることに起因するのかも知れませんが、検索画面で特殊文字のボックスを開いても正しく表示されず、四角が出て来だけです。その四角をクリックすると検索ボックスに、たとえば þ が現れます。しかし、この文字を含む語を検索しても「該当語なし」という結果が返ってきます。また、語彙リストを作成した場合、特殊文字は無視されて結果が出てきます。たとえば þe (= the) では þ が無視され、e として扱われます。また 3 は特殊文字、数字の両方で用いられますが、語彙リストでは 2 の次に現れます。したがって 3if (= if) のように 3 で始まる語彙は、他の語彙とは別の箇所に現れます。これには戸惑いました。

MEMT には興味深いテキストが収録されていますが、直接編纂に関わった研究者の使い勝手を優先した、いわば tailor-made なコーパスに仕上がっているというのが、現時点での印象です。今後このコーパスを入念に検索し、機会があれば結果を発表したいと考えております。(CD/定価 EUR60.00; \$72.00/ISBN 90-272-3230-X)

◆ 新刊紹介(1)

深谷 輝彦(梶山女学園大学)
fukaya@sugiyama-u.ac.jp

2004年10月英語コーパス学会第24回大会のシンポジウム・タイトルは「コーパスと言語理論」で、生成文法、認知文法、語用論のなかでコーパスがどのような役割を果たすか、が論じられました。この時に取り上げることができなかった

のが、Halliday の選択体系文法とコーパスの関係でした。その穴を埋めてくれるのが、本年3月に Equinox から出版された *System and corpus: exploring connections* です。

本書は、International Systemic Functional Congress 第29回大会(「選択体系言語学とコーパス」、Liverpool, 2002)で発表された論文をもとに構成されています。ほとんどの論文が選択体系機能言語学とコーパス言語学を対峙させ、その接点を真剣に探っています。Thompson & Hunston の丁寧な導入論文から始まり、12編の力作論文が並び、最後 Halliday の「あとがき」で締めくくっています。

ここでは、この論文集の中から、筆者が特に興味をもったものを二、三紹介します。最初のお薦め論文は Hunston の“Phraseology and system”です。コーパス言語学、特に Hunston お得意の pattern grammar から Halliday の選択体系言語学にどのような貢献ができるか、を考察しています。誤解を招く言い方をあえてすると、意味、文法から語彙に向かいながら、選択体系網の整備に焦点をおく Halliday の文法に対して、語彙から文法、意味に向かい、フレーズあるいは語の連鎖という統合関係を重視する pattern grammar は相補する関係にあるので、共同作業が大切だと説きます。この結論に加えて、取り上げる事実のおもしろさは Hunston ファン の期待を裏切りません。

その一方で、選択体系機能文法をコーパスに適用する作業を実際に行い、選択体系網の頻度



調査結果を報告するのが、Matthiessen の“Frequency profiles of some basic grammatical systems”です。この論文の主眼は、例えば過程の体系網がコーパス中でどのような頻度分布を示すことにあります。そしてその頻度の意義については、Halliday の「あとがき」が興味深い指摘をしています。しかし、注目すべきは、ここでいう頻度は Matthiessen 自身が約 6500 の英文(節数は約 16,000)を一つ一つ目で追いつながら、分析した結果から得られたものである点です。意味が文法、語彙に具現するという立場にたつ選択体系文法にとって、現在の文法タグではだめで、「物質過程」「行動過程」のようなより意味的判断が必要なタグを自動的付与できるソフトの必要性を、結果的に訴えています。

この課題については、同書の Neal の論文“Matching corpus data and system networks”が一つのアイデアを提案しています。West(1953)の *General Service List of English Words* があるように、語彙の意味ごとの頻度表を作り、そこから体系網を構築していくというものです。こうすれば、pattern grammar も含めてこれまでのコーパス言語学の成果を活かしやすい、と主張します。

最後に、本書には日本語の「痛み表現」を選択体系文法の枠組みで分析する M. Hori “Pain expressions in Japanese”も収められていることを添えます。(256 頁／定価£50.00; \$80.00／ISBN 1-904768-19-9)

◆ 新刊紹介(2)

中村純作(立命館大学)
jnakamur@gr.ritsusmei.ac.jp

本学会員加野(木村)まきみ先生(文化女子大学室蘭短期大学)が 2004 年に大阪大学に提出された博士論文の改訂版である *Lexical Borrowing and its Impact on English with Special Reference to Assimilation Process of Newer Loanwords from Japanese and German and Impact on the Existing Lexical System in English* (邦題『借用語の英語化過程と既存語彙に与える影響—英語における日本語とドイツ語からの借用語を中心に—』)がこの 2 月にひつじ書房より *Hitsuji Linguistics in English* No. 1 として刊行されました。木村先生の研究対象は早い時期から、木村まきみ

(1995)「OED 中の日本語からの借用語の特徴—OED2 on CD-ROM を使った研究—」(『英語コーパス研究』第 3 巻, 105-118)や木村まきみ(1998)「*Time, The Times* における日本語からの借用語」(『英語コーパス研究』第 5 巻, 63-79)に加えて、最近では木村まきみ(2003)「既存語と借用語の使い分け—*magnate* と *tycoon* の場合—」(『英語コーパス研究』第 10 巻, 25-40)と M. Kimura (2004) “*Magnate and Tycoon: A Case of Rivalry between Existing Vocabulary and Newer Loanwords as Seen in OED2 and BNC,*” in J. Nakamura, et al. (eds.), *English Corpora under Japanese Eyes*, pp. 93-113 などでお馴染みですが、本書はこれらの研究にドイツ語の英語への借用語に関する研究を加えて博士論文としてまとめられたものです。目次によりますと以下のような構成になっています。

【Contents】

1. Introduction
- I. Assimilation Process of Loanwords
2. Previous Studies and Associated Problems
3. Assimilation Process of Japanese Loanwords
4. Assimilation Process of German Loanwords
5. Comparison of Assimilation Process of Japanese and German Loanwords
- II. Impact of Loanwords on the Existing Lexical System
6. Introduction and Previous Studies
7. Coexistence of Old Vocabulary and the Newer Loanwords
8. A Case Study of Synonym Pair: *Magnate* and *Tycoon*
9. Concluding Remarks and Future Perspective
- Bibliography
- Dictionaries and Corpora
- Summary in Japanese
- Appendices

辞書学やCR-ROM版辞書のコーパスとしての利用、あるいは借用、借用語などに興味をお持ちの方に是非ご一読をお勧めします。(B5 変形上製264頁／定価8,000円(外税)／ISBN 4-89476-268-4)

なお、このほかに英語コーパスの入門書と、コーパスを利用した意味論研究に関する翻訳書を小生のところにお送りいただいておりますが、*Newsletter* 編集上の都合によりご紹介は次号にまわさせていただきます。

英語コーパス学会 Newsletter No. 54

Aug. 25, 2006

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京大外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 28 回大会のご案内

英語コーパス学会第 28 回大会は、10 月 7 日(土)北海道大学で開催されます[〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 札幌駅から地下鉄南北線「麻生方面行き」に乗車、2 つめの「北 18 条」駅下車、徒歩西へ約 500m <http://www.hokudai.ac.jp/index.html>]。会場校の園田勝英先生、高見敏子先生のご尽力に感謝いたします。

詳しくは、同封の「大会資料」をご覧くださいのですが、今大会では恒例の午前中のワークショップのほか、研究発表 4 件と特別講演を準備いたしました。

研究発表につきましては、運営委員会の査読を経て、7 月 16 日(日)に中央大学で開かれた大会準備委員会での最終審査の結果、北本徹平氏(大阪大学大学院生)の「live a happy life と live happily の交替可能性」、村形舞氏(東京大学大学院生)の「法助動詞を伴う文における until 節の節順選択」、木村恵氏(獨協大学)、田中省作氏(立命館大学)、八島等氏(東京都立城東高等学校)、依田みずき氏(元東京学芸大学大学院生)の「中高教科書コーパス分析と習得困難度要因に基づいた自動語彙レベル判別の試み」、岡田毅氏(東北大学)による「コーパス分析と中学校英語教科書 動詞活用形の観点から」の 4 件が選ばれました。

特別講演では、『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』(ひつじ書房)の編者、宮田 Susanne 氏(愛知淑徳大学)に「発話データベース CHILDES の概要とその成果」の演題でお話しいただきます。

恒例となっております午前中のワークショップでは、特別講演とリンクさせ、宮田 Susanne 氏を講師に「発話データベース CHILDES 入門」と題して、CHILDES の解析プログラム

CLAN の実習を行っていただきます。参加御希望の方は、電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局宛にお申し込みください。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です。非会員の場合は当日会費 1,000 円で、ワークショップと大会の両方に参加していただけます。

John Sinclair 先生の講演会報告

Sinclair 先生は 8 月 18 日(金)から西南学院大学を会場に開催された AsiaTEFL での Plenary Session と Demonstration のため、Thomson ELT の招きにより来日されました。この機会を利用して、*Newsletter* や JAECS-ML を通じてお知らせしておりました講演会を福岡だけでなく関西地区と東京で開催しました。

関西地区の講演会は 8 月 19 日(土)午後 3 時より立命館大学末川記念会館 1 階ホールにおいて行われ 82 名の参加者を得ました。講演は“Exploring a Corpus”と題した主に新しい 2 つのソフトウェアの紹介でしたが、それに先立って、それら 2 つのソフトウェアの必要性に関する理論的な背景について詳しい説明が行われました。まず、従来の Grammar と Lexis を峻別する枠組みそのものに疑問を投げかけるとともに Phraseology の重要性を意識する枠組みへの転換が起きていること、従来は非常に少ないデータから如何に結論を導き出すかが問題であったが、コーパスが巨大化するにつれて大量のデータを如何に効率的に利用するかが問題になっていること、数量的分析が必要になっていることが指摘されました。さらに従来の slot-and-filler 型の分析から successivity を問題にする必要性、paradigmatic model から syntagmatic model への転換の必要性などが指摘され、これ

らの必要性に応えるソフトウェアとして Concgram@ と PhraseBox™ が紹介されました。

Concgram@は n-gram と Concordancer の機能を合わせ持っており、2 語以上を対象にその組み合わせを、前後関係の違いだけでなく、途中に何語か挿入された場合も含めて全て抽出するプログラムで、“work” と “hard” の検索結果が示されました。PhraseBox™ は Sinclair 先生がスコットランド政府の語学教育のために実用化しようとしている非常に簡便なソフトウェアです。2 語以上のキーワードにも対応した CQL Query が可能なコンコーダンサーで、同時に vocabulary words と grammatical words によるコロケーションを見ることができるものでした。BNC の 70%、Bank of English の 50% に Scottish English を加えた 3 億語のコーパスを利用した “gamut” のコンコーダンスとコロケーション、“a,” “of,” “grass” から “a bit of grass,” “a strip of grass,” “a blade of grass” 等が抽出される様子や、“she” の重要な共起語が “when” であり、さらに “when she was” に対しては “approached” が典型で、何か良くないことが起こっている文脈で使用されることなどが次々と紹介されました。1 時間 30 分の予定の講演が 15 分ほど長くなり、その後の 30 分にわたる質疑、応答も熱がこもったものでした。

その後、会場を移動、5 時 30 分から 35 名が参加しレセプションに移りました。主催者の挨拶の後、JAECS から第 10 号の名誉会員証を差し上げ、Sinclair 先生のお言葉、トムソンの代表者からの乾杯と続きました。Sinclair 先生との懇談、彼の著書にサインを頂いたり、記念写真を撮ったり、参加者同士での情報交換などで、瞬く間に 2 時間のレセプションが終了しました。

翌日は 10 時過ぎの新幹線で東京に移動。途中、原宿に立ち寄りお子さんたちへのお土産の購入と昼食。2 時過ぎに会場の日大文理学部 100 周年記念館に到着。3 時からの講演会では、基本的には前日の中身を踏襲しながら、最初にコーパス言語学の歴史を少しばかり紹介されました。こちらでも 15 分超過し、たっぷり 30 分の質疑にお答え頂きました。講演会参加者は 67 名でした。5 時 30 分からは JAECS では、初めての試みとしてケイタリングサービスを利用

したレセプション。参加者は 22 名とこじんまりとしたパーティでしたが、とても良い雰囲気です。終えることができました。

Sinclair 先生は翌日、成田発で帰国。スコットランドでご家族との休暇中にもかかわらず、73 歳のご高齢をおして、遠路はるばる来日、5 日間のみ日本滞在中、2 日間は JAECS に割っていただきました。そのお陰で我々の長年の懸案であった Sinclair 先生の講演会とそれを契機に名誉会員になっていただくことが、実現しました。このことを可能にいただいたトムソン ELT、特に、6 ヶ月にわたり準備いただいた小嶋里佳さんにはお世話になりました。日大では塚本聡先生、秋山孝信先生に会場、パーティに関して特にお世話になりました。そのほか、関係大学の事務の方々、院生諸君にもお世話になりました。この紙上を借りて篤くお礼を申し上げます。最後になりましたが、酷暑のおり、遠方より駆けつけていただいた会員諸氏に心より感謝いたします。

中村 純作 (立命館大学)

学会賞応募規定

第 6 回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。
2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2007 年 3 月 31 日

【発表】2007 年度秋季大会

『英語コーパス研究』第14号について

前号のニューズレターにおいて『英語コーパス研究』第14号(2007)の原稿を募集しましたところ、論文4件、研究ノート1件の申し込みを頂きました。『英語コーパス研究』では、論文のほか、研究ノート、実践報告、書評、海外レポートなども募集しています。まだ執筆申し込みをされていない会員の方も、原稿締め切りの9月末日までに原稿を送付いただければ、審査の対象となりますので、ぜひとも奮ってご投稿ください。

なお、投稿規定、スタイルシートについては、今回より一部修正されています。詳細につきましては、http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/ECS_SGuide-j.html をご覧ください。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
塚本 聡(日本大学)

JAECS 東支部活動報告

JAECS 東支部では、第4回研究談話会を以下のとおり開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時：2006年9月17日(日)

13時30分～17時30分

場所：大東文化大学大東文化会館 K-0302

<http://www.daito.ac.jp/exten/access.html#01>

東武東上線東武練馬駅前 徒歩1分

池袋駅から東武練馬駅まで、約15分

参加費：会員無料・非会員300円

(事前申し込み不要)

発表者・題目：

小林雄一郎(法政大学大学院)

「タグ頻度解析による学習者レベルの識別
The NICT JLE Corpus を例に」

大羽 良(早稲田大学非常勤講師)

「Web形式による日英対訳コーパスの検索
システムの開発とその活用例」

JAECS 東支部支部長

新井 洋一(中央大学)

新入会員紹介(8月25日現在、Sは学生)

黒崎 紫乃 ロンドン大学 Institute in Paris 博士
課程 S

秀野 作次郎

長井 みゆき 名古屋大学大学院 S

村形 舞 東京大学大学院総合文化研究科言語
情報科学専攻博士課程 S

森 茂 大分大学医学部

森本 由子 筑波大学大学院 S

所属の変更

井上 亜依 長崎外国語大学

岩崎 克己 広島大学外国語教育研究センター

大森 誠 東広島市立向陽中学校

木村 恵 獨協大学

小室 誠一 バベル翻訳大学院

田中 美和子 京都ノートルダム女子大学

谷村 緑 京都外国語大学

廣瀬 絵美 フリーランス

堀池 保昭 武庫川女子大学付属高等学校

森田 光宏 山形大学人文学部

FORUM

新刊紹介

中村純作(立命館大学)

jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

お送り頂いた新刊で、*New Letterer* 編集上の都合により53号でご紹介できなかった2点を今回は紹介させていただきます。

まず、荒木一雄、天野政千代両先生監修『英語学入門講座』の第10巻として、本学会の会員、大門正幸、柳朋宏先生(中部大学)による『英語コーパスの初歩: An Introduction to English Corpora』が英潮社より本年3月に刊行されました。著者による「まえがき」にもあるように、コーパスという言葉が定着してきた現在、研究者や英語教員だけでなく一般の学習者(主に言語・文化あるいは英語・英文学を専攻する学部

生か?)にも分かりやすい入門書の必要性から本書は書かれたものである。その特色として、コンピュータに詳しくない学習者にも分かりやすいように画像を多用、できるだけ金銭的負担を必要としない方法を優先し、Mac OS と Windows に対応して書かれていることの3点が挙げられる。

本書は11章から構成され、コーパスの定義から始まり、コーパスの種類と変遷、ブラウザ上での検索、インターネットの検索エンジンの使用、エディターによるテキストファイル検索、MS-Wordによるワイルドカードを使った少し高度な検索、タグ付きコーパスの検索、コンコーダンスの作成、WordbanksOnlineの利用法とそのファイルの転送、正規表現を使った検索などを取り扱っている。具体的に取り扱われるトピックも“anathematize”の語義とその用例、“fill in/out”の使用頻度の英語変種による差異、A. Bierceの*The Devil's Dictionary*のダウンロードと検索、corpusの複数形、likeの品詞による分布、noneの数による一致など興味深いものがある。ただ、画像が多いこととMacとWindowsに対応させるためにスペースがとられることもあり、面白い言語現象を提示しつつ学生をコーパスに引き込んでいくための例がもっと欲しいところである。延々と続くSusanne Corpusの品詞標識リストなどは実際の検索例から品詞標識の有効性を示すことに使った方が良さそうである。Mac上でのコマンドモードでのコンコーダンスの作成はちょっと初心者には取っ付きにくいと思われるし、Windows版に対応したCygwinの使用法については説明が見られない。正規表現の説明にはWordbanksOnlineが使われているが、実際にアクセスできる読者は限られている。この辺りは、第2版以降改訂されることを切に希望したい。とまれ、コーパスを講義するものにとって、大いに参考になる一書であることに間違いはない。是非、ご一読下さい。(B5版306頁/定価3,400円(外税)/ISBN 4-268-00411-4)

次にご紹介するのはMichael Stubbs (2002) *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics* (Oxford: Blackwell)の翻訳で、本年5月研究社より出版された南出康世、石川慎一郎監訳『コーパス語彙意味論：語から句へ』である。著者のStubbs教授は現在ドイツのトリ-

ア大学の英語学教授。限られた時間とスペースの中で、著者の長年にわたる意味論研究とそれに基づいた講義の集大成である本書の内容を十分理解し、論評するだけの能力を筆者は持ち合わせていないが、従来のGrammarとLexisを厳密にレベル分けし、意味は個々のLexisにあるとする伝統的枠組みから出発し、Phraseologyの重要性を徹底的に追求したものが本書だと言える。多義語がより長い文脈の中で完全に非曖昧化し、予測される結合形の中で使用されていること、さらにこのことにより、評価の意味が与えられたり、テキストの構成にも影響が及ぶこと、文化的にも重要なキーワードとなったりするかが、句、テキスト、文化のレベルで検証されている。それも全てコーパスを用いた事例研究によることは本書のタイトルが示すとおりである。従来難解だと思われていた意味論の世界が、豊富な具体例で説明され、展開されていく様子にコーパスの威力を実感することができる。但し、言語学、英語学の概論を終えた院生、研究者が対象。

このようにコーパスを駆使する手法は、英国流の典型的な経験主義の流れを汲むもので、Malinowskiに始まり、Firthにより確立されるロンドン学派を現在に引き継ぐものと考えられる。StubbsとともにCollocationとPhraseologyを重視するJohn Sinclair、*Pattern Grammar*のSusan HanstonやGill Francis、*Corpus Linguistics at Work*でCorpus-drivenな手法を提案しているElena Tognini-Bonelliなどの一連の流れとその方向性を理解するのも本書は重要である。

訳者の「あとがき」によると本書は発足して4年になる関西英語辞書学研究会(Kansai English Lexicography Circle, KELC)の2番目の輪読用テキストで、発表者を決め、ハンドアウトやパワーポイントを使う研究発表の形式で、約1年をかけて読んだ成果として生まれたものだという。難解な大著に挑戦し、出版にこぎつけた監訳者の南出先生(大阪女子大学名誉教授)、石川先生(神戸大学)と各章を担当された10名の先生方(スペースの都合でお名前は割愛)に敬意を表するとともに、出版を引き受けた『英語青年』編集長の津田正氏にも敬意を表したい。(B5版376頁/定価3,800円(外税)/ISBN 4-327-40143-9)

岡田毅(東北大学)
t-okada@lark.intcul.tohoku.ac.jp

6月23日、24日の両日にわたり、University of Nottingham の CRAL (Centre for Research in Applied Linguistics) がホスト校となって The 3rd IVACS (Inter-Varietal Applied Corpus Studies) International Conference が開催された。本学会からは兵庫県立大学の瀬良晴子先生と私が参加し研究発表を行った。本稿は、keynote speaker の一人として、現在はイタリアの The Tuscan Word Centre に席を置かれている John Sinclair 先生を迎えての大会の報告である。

約 90 の研究発表がパラレルセッション形式で行われ、それぞれのテーマは、EFL 教育へのコーパスの応用、phraseology の諸相、ESP におけるコーパスの役割、パラレルコーパスの可能性などであった。

開催校である Nottingham 大学の研究者の発表には CANCODE (Cambridge and Nottingham Corpus of Discourse in English) を駆使したものが多く、例えば Irina Dahlmann 氏の、pause を手がかりとしての spoken English における multi-word unit の抽出に関する発表などは、母語話者の言語直観の重要さと、コーパス分析から得られる数値的な結果との関連性を扱ったもので興味深かった。

コモンルームでは、Birmingham に拠点を置く Speechinaction 社の Richard Cauldwell 氏が大会の初日から Streaming Speech online courses のデモを行い、参加者から少なからぬ関心を集めていた。Speechinaction 社は 2004 年に British Council から Innovations in English Language Teaching に与えられる ELTON 賞を与えられている。中・上級学習者向けのこの発音トレーニング教材は、これまで British/Irish の spontaneous speech を素材とした双方向的システムであったが、最近では American/Canadian の素材もカバーするようになり、初級学習者向けのコースも準備中である。日本のメーカーが開発している発音矯正ソフトなどにも高性能なものが増えつつある(例えば株日本ビクター社の「ソフトウェアレコーダー」)が、問題になるのは、学習者がモ

デルとする音声素材である。この点、Streaming Speech で提供されるそれは、Nottingham 大学等とのコラボレーションの成果もあり、実際の場で用いられた発話であるために、より自然な発音や応答表現が習得しやすいのではないかと感じられた。使用料金等に関しては、以下の URL を参照されるかメールで Cauldwell 氏にお問い合わせ願いたい。

<http://www.speechinaction.com/>
richard@speechinaction.com

大会をしめくくる Keynote Speech は、“From Text to Tree: LUG, LUM and PUB” のタイトルで University of Helsinki の Anna Mauranen 先生と Sinclair 先生が担当された。LUG (Linear Unit Grammar) を用いて、linear なテキストから意味へと繋がるのに必要な最低限の hierarchical な情報を入手していくという考え方の中にあって、単純な chunk の連続体としてテキストを処理するのではなく、chunk を例えば message type や organizing type 等に分類し、これらを元に PUB (Provisional Unit Boundary) を動的に認識し、それを LUM (Linear Units of Meaning) としてテキストを処理していくという概念が具体的な発話データに言及しながら提示された。LUG は linear なテキストと hierarchical な文法との間の橋渡しの役割を担うものであって、従来の言語研究に比べて、一層 spoken テキストに重点を置いたこの研究を進めることによって spoken と written テキストの類似性が明らかになってくると主張された。

「皆さんが Power Point ばかり使われるから、私もようやくこれを使えるようになりました。どうですか？上手くってます？」と茶目っ気を交えて(その実、手馴れた操作をなさりながら)、Mauranen 先生との講演を終えられた Sinclair 先生であったが、実はこの後に、予定にないプレゼンテーションをして下さった。一応、学会の閉会を待って、しかも部屋を移動して、Sinclair 先生はアメリカ、カナダからご帰国直後のお疲れも全く見せずに、新しいコーパス・サービスを紹介して下さいました。確かに開発企業は Scotland にあるが、未公開・開発中であるために Sinclair 先生は「このサーバーは Scotland (西北端の) Skye 島の霧の中に隠れて

いる」と、目を輝かせて部屋を移動した聴衆を文字通り煙(霧?)に巻いておられた。

「9月頃には公開できるだろう」とおっしゃるシステム PhraseBox™のデモ版をオンラインで見せて頂いた。開発中であるために、全貌を詳しく教えて下さらなかったが、concordance や collocation 集計・分析機能が相当に強化されていること、また対象とするコーパスの種類と量が圧倒的であろうことが、検索設定ページから垣間見ることができた。

本 Newsletter が発行される時期と Sinclair 先生が本学会で講演なさり、おそらく PhraseBox™ の紹介もなさるであろう時期とが微妙な関係になるが、少なくともこのシステムの本格稼働は秋以降となるために、ここで紹介させて頂いた。デモ版については以下のサイトにアクセスされたい。

<http://www.phrasebox.com/phrasebox/>

10年以上前に Birmingham でお目にかかった頃と比べて、少しお体が「丸く」なられたような感じを受けたが、まだまだエネルギーで新しい分野に意欲的に取り組まれている Sinclair 先生のお姿には頭の下がる思いであった。

発表前日に大学のバブで Japan vs. Brazil の WC フットボール試合を England サポーターたちと観戦することができた。彼らは(下心があるとは言え)一様に Japan 鼻根であった。「なぜ Japan はホームでもアウェイでもブルーしか着ないんだ?」というパーテンダーの質問には、即興の思いつきで答えるしかなかった。IVACS 2008 はアイルランドで開催予定と聞かされた。

Workshop “Corpus Approaches to the Language of Literature”について

堀 正広(熊本学園大学)
hori@kumagaku.ac.jp

2006年7月25日(火)にフィンランド東部の閑静な大学町 Joensuu で行なわれた標記大会について報告する。これは、Poetics and Linguistics Association (通称、国際文体論学会)の第26回

年次大会の前日に、Oxford Archive の Martine Wynne によって企画された。この workshop の目的は、タイトルが示すように、コーパス言語学の成果や方法論の文学作品の言語文体研究への援用である。

まず、企画者の Martin Wynne が文体研究とコーパス言語学の共通性と相違点を述べ、文体研究にはデータ収集は不可欠であるという点から、コーパス利用の利点と今後の可能性が強調された。

次に、ランカスター大学の Jonathan Culpeper が、現在共同制作中の Shakespeare’s Dictionary の構想を述べた。たとえば、horrid はどのような語や特定の意味のタイプの語や品詞やレジスターと共起するのか。また、どの劇に頻出し、どの人物がよく使うのか、などをコーパスを使って収集した辞書である。内容語だけでなく“and”などの機能語や“ah”のような感嘆詞も収録される予定である。発表の後、実践的なワークショップが行われた。完成までには数年はかかるとのことだが、コーパス言語学の知見があって初めてなしえる業績である。

次に、リバプール大学の Michaela Mahlberg が Charles Dickens における word cluster について、Dickens は同時代の19世紀の作家達に比べて3語から5語の cluster がいかに多いかを豊富な例を挙げて指摘した。たとえば、as if he had been, in the course of the, a quarter of an hourなどは最も頻度の高い5語の cluster である。発表後、wordsmith を使って、このような cluster の見つけ方が実践的に教授された。

Mahlberg は昨年 John Benjamin から *English General Nouns: A corpus theoretical approach* を刊行している。拙著 *Investigating Dickens’ Style: a collocational analysis* に刺激を受け、Dickens を次の研究対象に選んだとのことだった。私の本を3度読んだと言われたときは大変恐縮した。

詳細は <http://www.pala.ac.uk/signs/corpus-style/joensuu.htm> を参照していただきたい。ここには今回発表に使われた power point と練習問題が公開されている。日本人の参加者はみなコーパス学会の会員で、瀬良晴子、田畑智司、奥総一郎各氏と私の4人であった。

英語コーパス学会 Newsletter No. 55

Dec. 1, 2006

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 28 回大会報告 概要

英語コーパス学会第 28 回大会は、10 月 7 日(土)、北海道大学高等教育機能開発総合センターの大講堂で開催されました。関西と関東から遠方の地であったこととあいにくの雨模様の天候のため 67 名(会員 52 名、新入会員 2 名、当日会員 13 名)と、参加者は例年ほど多くありませんでしたが、意欲的な研究発表と、CHILDES をテーマにした初めてのワークショップと特別講演が行われ、充実したプログラム内容でした。

午前中のワークショップは「発話データベース CHILDES 入門」と題して宮田 Susanne 先生(愛知淑徳大学)に講師を務めていただき、35 名の参加者がありました。概要につきましては、3 ページ以下の山崎俊次先生(大東文化大学)の報告をご覧ください。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して言語文化部長の杉浦秀一先生にご挨拶をいただきました。学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)より、第 5 回の学会賞の発表と選考経過の説明があり、引き続き授賞式が行われ会長より受賞者に賞状と副賞が授与されました(第 6 回学会賞の募集をしております。5 ページの規定に従い奮ってご応募ください)。

引き続き研究発表 4 件と特別講演が行われました。今回は、英語の構文分析 2 件と中高の英語教科書に関わる発表が 2 件でした。その概要につきましては、司会の先生にご執筆いただきました「研究発表」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 35 名の出席がありました。加野(木村)まきみ先生(文化女子大学室蘭短期大学)司会のもと、会長挨拶の後、三浦省五先生(福山大学教授)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換

で盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

例年ほどの参加者は望めませんでした。北海道大学の先生方と院生が出席してくださいました。「素晴らしい学会でした」、「運営はとてもスムーズで良かった」などのアンケートのご回答をいただき、事務局としてホッとしております。これも、開催校である北海道大学の園田勝英先生と高見敏子先生の献身的なお力添えがあつてのことでした。また、会場を提供頂いた北海道大学言語文化部にも、この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。学生の皆さんにも、会場準備、受付などのお手伝いをいただき大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。

第 5 回英語コーパス学会賞決定!

学会賞

受賞者: 塚本聡氏(日本大学文理学部助教授)
受賞対象: KWIC Concordancer for Windows と Treebank Search の開発と無料公開

奨励賞

受賞者: 加野(木村)まきみ氏(文化女子大学室蘭短期大学専任講師)
受賞対象: *Lexical Borrowing and its Impact on English*(ひつじ書房, 2006)

研究発表

live a happy life と live happily の交替可能性
英語同族目的語構文と様態の副詞(句)の
交替可能性検証にむけて

北本 徹平(大阪大学大学院生)

本発表は、安井(1982:420)において同義といわれる live a happy life と live happily をケーススタディとして取り上げ、British National Corpus と Web を検索することにより、同族目的語構文

と自動詞+状態副詞(句)構文のそれぞれの共起語の違いから、両者が交替不可能であると主張した。具体的には、ever after(その後ずっと)という副詞的な表現がBNCやWeb検索を行うと、live happilyとは多く共起するが、live a happy lifeとは全くではないにしても、極めて共起しにくいという新たな共起制限を指摘した。そして、その違いがあるので、従来の研究の見解と異なり、両者は交替不可能であると結論付けた。さらに、Tenny(1987, 1994)による、同族目的語はアスペクトの観点から見ると行為を終結に導く機能がある、との見解を援用することにより、同族目的語構文がもつ終結という意味とever afterがもつ「その後ずっと」という非終結的な意味とが意味的な不一致をおこすため、上記の共起制限が説明される可能性があること示唆した。

フロアーからは、live a happy lifeとever afterが、少ないながらも、共起する例があるので、それらについては、詳細に吟味し、細かな検討を加える必要があること、アスペクトが絡むことで上記の共起制限が生じている可能性が強いので、Vendler(1967)以降のアスペクト論をさらにしっかりとおさえる必要があることなどの示唆がなされた。

コーパスを検索することで、同族目的語構文についての新たな共起制限を指摘し、その共起制限の説明の方向性を示した点が評価される。今後の研究のさらなる発展が期待できる発表であった。

大室 剛志(名古屋大学)

法助動詞を伴う文におけるuntil節の節順選択

村形 舞(東京大学大学院)

時間節は、主節との時間関係に対応する節順が好まれるため、主節の時間的な終結点を規定するuntil従属節は、一般には、主節に後続すると言える。しかしながら、until節がその主節より前に生起する場合がある。従来は、このuntil節前置の現象に対して、前文との関係など、談話構造からの要因を探る研究が多かったと思うが、本発表は、特に文の範囲内に限り、until節の前置の要因を探った点が、特徴的であった。

具体的には、BNCの書き言葉テキストより無作為に抽出した1,000例のuntilより、定形主節に対する定形until節をなす384文を観察し、文

末にuntil節を持つ文(365件)の多くは法助動詞を持たず、過去時制であるのに対し、文頭にuntil節を持つ文(19件)は主節に法助動詞を持ち、until節が現在時制であるという特徴を発見した。さらに、この特徴は条件のif従属節が主節に先立つ時の特徴と共通することを指摘し、上記と同じ特徴を持つuntil節でも、その主節に後続してしまう場合もあるが、それは、それら全体が嵌め込み文の位置に生起するため、until従属節をそこでも前置すると、文理解に負担をきたすため、前置は起きないと論じた。

フロアーからは、一番問題にしている事例が19例というのは、それに基づいてなにかの主張をするには少ないのではないかと。従属節が前置される要因には、いろいろあるだろうが、やはり談話の流れという要因がもっとも強いのではないだろうか。法助動詞といってもいろいろあるし、さらに、モダリティ要素にまで広げたら、いろいろな要素(例えば、文副詞)などもあるので、事実を詳細に検討していく必要があるのではないかと、といった質問、コメントが出された。

Until節前置を誘発する文内部での一つの興味深い要因に気付いた点は評価でき、今後様々な要因を同定することに努めることにより、それらの要因が多く整えば整うほど、until節が前置されやすいという方向性が見えてくるのではないかと期待される。

大室 剛志(名古屋大学)

中高教科書コーパス分析と習得困難度要因に基づいた自動判別の試み

木村 恵(獨協大学)

田中 省作(立命館大学)

八島 等(東京都立城東高等学校)

依田 みずき(元東京学芸大学大学院生)

本研究は、中高校の英語学習者を対象とした語彙テスト作成の一環として行われたものである。各単語を教科書における出現状況および語彙学習を困難にしている要因の観点から自動的にレベルを判別し、語彙テストの基礎となる語彙リストを作成する方法論について論じたものである。

習得困難度の度合いを測るため、各単語の属性を「数値化」し、自動的にその単語のレベルを判定する過程で、単語の習得困難度の要因を

教科書出現学年順、頻度数、散らばり、品詞、多義性、抽象性、文化的親密度、語形上・音声上・意味上・翻訳上の類似性として、「可能な限り自動化」した。その結果、中学内容語彙の判別性能は85.1%、機能語では93.1%であった。

フロアーからは、習得困難の要因は妥当なものであるのか、各要因は独立した要因か、それとも相互に関係しあっているのか等活発な意見が交わされた。意欲的な研究であるが、その妥当性はさらなる研究を待たねばならないであろう。

成沢 義雄(東北学院大学)

コーパス分析と中学校英語教科書:動詞活用形の観点から

岡田 毅(東北大学)

本研究は、BNCを中心とした大規模コーパスの分析から得られる知見が、日本の中学校検定英語教科書においてどのように有効に活用されるべきかという問題提起である。

教科書英語では、動詞活用形の導入では基本形から活用変化形へという流れ、つまり「平易な形から困難な形」の順で導入されている。しかし、これはBNCの分析によれば英語の実際の使用実態とは一致しない。コーパス研究者からは英語教育への批判、提言がこれまでも多く出されているが、本研究も英語の使用実態と教科書英語のありように一石を投ずるものである。

フロアーからも活発な意見が出された。そもそも外国語としての日本の教科書英語は母語使用を基準にして編纂すべきであるのか、その論拠は何か。この論議はさらなるコーパスの研究とともに一層深化されることを期待したい。

成沢 義雄(東北学院大学)

ワークショップ・特別講演

発話データベース CHILDES

宮田 Susanne(愛知淑徳大学)

言語習得のデータベースであるCHILDESの名前は聞いていたが、その内容を詳細に知っている研究者はそんなに多くはないというのが、実情ではなからうか。専門外ではあるが、宮田Susanne先生の特別講演会の司会を務めた関係

でここにワークショップ、特別講演の報告をするものである。

ワークショップでは、(1) CHILDESの概要、(2) 解析プログラムCLANのセットアップと基本的な使い方、(3) 形式フォーマットのCHATの基礎、(4) 音声・画像とのリンク、(5) 形態素解析プログラムMORと自由タグ付けCoder Modeの紹介等が行われた。比較的自由に書き込みが可能なデータベースで、言語習得のみならず、バイリンガルデータ、言語障害・手話データ等の有効な利用が可能であることが理解できた。

ワークショップはいつも時間が限定されていてその場では理解できたような気になるが、後で復習すると困難を伴うことが多い。今回は同名の書籍がひつじ書房より出版されているので、理解を深めることができたが、講師の使用コンピュータがMACであったためにスクリーンの図と受講者のWindowsパソコンのモニターとのギャップに戸惑ったという声を聞いた。

特別講演会は第1部でこのCHILDESの概要と解析プログラムが紹介され、第2部ではこの発話データベースを使った研究の事例報告が行われた。発話データベースCHILDES(チャイルズ、Child Language Data Exchange System)は、発話データ、データ表記のフォーマットCHAT(Codes for the Human Analysis of Transcripts)、そして分析プログラムCLAN(Computerized Language Analysis)からなるシステムの名称である。この発話データベースは、1984年に北米・ヨーロッパの幼児言語研究者20人が考案したものであるが、今では4,500人の研究者が登録し、30カ国の言語を含む多種多様な言語データベースに成長している。データの種類は第一言語習得・第二言語習得データ、バイリンガルデータ、言語障害・手話データ、story tellingデータ、オーディオ・ビデオ付きデータがあり、それらを解析するのに用いられる言語解析プログラムCLANの利用によりタグ付けやさまざまな分析が可能になっている。たとえば、単語の頻度(FREQ)、発話数・単語数および平均発話長(MLU)、特定の単語を含む発話のリスト(KWAL)、形態素解析(MOR)等の分析が可能である。さらにその発話データの音を聞き(Sonic CHAT)、画像をみる(Movie CHAT)こと

によって、その利用と信頼性が増すのである。この発話データベースを使った事例報告では、英語コーパス学会ということもあり、過去の英語の研究例として、年齢による発達の変化を扱った filler の研究 (Peters 2001) が取り上げられた。

この CHILDES は非営利なので無料でデータが利用でき、分析プログラムも簡単にダウンロードできる。また日本語データベースを構築する目的で JCHAT が設立されており、日本語環境の整備にあたっている。詳細は以下のサイトを参照されたい。

<http://childes.psy.cmu.edu>

<http://chat.cyber.sccs.chukyou-u.ac.jp/JCHAT/>

山崎 俊次(大東文化大学)

ハンドアウトのダウンロードサービス

第 28 回大会のワークショップと研究発表のハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 21 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂 (yasuishikawa@hotmail.com) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。

1. ワークショップ：発話データベース CHILDES 入門
2. live a happy life と live happily の交替可能性
3. 法助動詞を伴う文における until 節の節順選択
4. 中高教科書コーパス分析と習得困難度要因に基づいた自動判別の試み
5. コーパス分析と中学校英語教科書：動詞活用形の観点から

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

学会誌『英語コーパス研究』第 14 号について

『英語コーパス研究』第 14 号 (2007) に多くのご投稿をいただきありがとうございます。6 月末の時点では、論文 4 件、研究ノート 1 件の申し込みでしたので、いささか心配をしております。

ましたが、9 月末の原稿締め切り時には 12 件(内訳は、研究論文 8 点、シンポジウム論文 3 点、研究ノート 1 点)の申し込みがありました。これは、前回の数を上回る応募でした。また、扱う内容も、統語論から英語史、あるいはコーパス作成について論じるものまで広範囲に及んでいます。現在、査読審査をほぼ終了し、採否決定、必要に応じて改訂などをお願いしているところです。来春の刊行に向け、現在、印刷工程に向けて進行中です。

学会誌は、学会員の活動を表す指標と行うことができるでしょう。今回、このように多数の論文の応募があったことは、学会員が活発に活動されていることの証でもあります。今後とも、このような活発な活動が続くことを願います。また、学会誌についてお気づきの点があれば、お知らせください。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
塚本 聡(日本大学)

第 29 回大会研究発表募集

2007 年度の春期大会(第 29 回大会)は 4 月 28 日(土)に同志社大学京田辺キャンパス (<http://www.doshisha.ac.jp/>) で開催される運びとなっております。つきましては、大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

- 【資格】本学会会員であること。
【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。
【提出物】発表要旨を A4 判 25 字×32 行で 3~4 枚以内にまとめ Word、一太郎、PDF ファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

- 【応募締切】2007 年 1 月 9 日(火)必着
【採否決定】2007 年 1 月末日
【発表時間】発表 20 分 + 質疑応答 10 分

学会賞応募規定

第 6 回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。
2) 論文の場合は抜刷りまたはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので同封は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2007 年 3 月 31 日

【発表】2007 年度秋季大会

や語学授業への活用の具体例を示されました。どちらの発表とも、とても興味深い内容で、今後の大会での発表、学会誌への掲載が期待されます。

11 月 18 日中央大学後楽園キャンパスで、大東文化大学の招聘で来日中の Dr. Sebastian Hoffmann 氏(ランカスター大学)に、“Investigating Language Change: Grammaticalization and Corpus Data” の演題でご講演いただきました。

短期間の滞在でお忙しいにもかかわらず、快くお引き受けていただいた Hoffmann 先生に厚くお礼申し上げます。会員の方々へのご案内期間が短かったのと、他の学会日とやむを得ず重なった点については、お詫びいたします。

参加者は 10 名ほどでしたが、講演後の質疑応答では、ほぼ全員から質問やコメントが出され、活発な講演会になりました。なお、この講演会は、中央大学人文科学研究所の後援も受けたことを付記させていただきます。

東支部支部長
新井洋一(中央大学)

新入会員紹介(12月1日現在、Sは学生)

和泉 絵美 独立行政法人 情報通信研究機構
自然言語グループ

大友 千乃 東北大学大学院 国際文化研究科 S
篠原 勇次 足利工業大学 共通課程 英語研究室

住吉 誠 摂南大学

早坂 慶子 北星学園大学

三浦 愛香 フリーランス教材編集者

山田 義裕 北海道大学 言語文化部

事務局から

2006 年度会費未納の会員の方々には同封の払込取扱票にて納入をお願いいたします。

2004 年度および 2005 年度会費未納の会員の方々には「会費納入のお願い」と払込取扱票を同封させていただきました。会費納入にご理解・ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。なお、会費納入等に関するお問い合わせは、石川保茂(yasuishiakwa@hotmail.com)までお願いいたします。

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。

東支部活動報告

9 月 17 日に大東文化大学で第 4 回英語コーパス学会東支部研究談話会が開催され、発表者を含め 15 名の参加がありました。

小林雄一郎氏(法政大学大学院)が、「タグ頻度解析による学習者レベルの識別 The NICT JLE Corpus を例に」、大羽良氏(早稲田大学非常勤講師)が「Web 形式による日英対訳コーパスの検索システムの開発とその活用例」のタイトルでそれぞれ発表されました。

小林氏は多変量解析を用いて、The NICT JLE Corpus における発達指標について論じ、CLAWS4 (C7 tagset) で情報付与したデータにコレスポネンス分析を実行し、学習者の SST レベルとの相関を調べ、初級者と上級者を分ける品詞・文法項目の使用頻度を明らかにされました。大羽氏はタガーで品詞付けされた日英対訳コーパスを Web 上で検索できるツールを独自に開発されました、ご発表ではその機能(KWIC 表示、ジャンル別語彙表、ジャンル別品詞表、関連対訳語検索)の紹介と、日英対照研究

英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありましたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せください。

FORUM

新刊紹介

中村純作(立命館大学)
jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

最近お送りいただいた新刊、2点を今回は紹介させていただきます。

まず、本学会会員の八木克正先生(関西学院大学)による『英和辞典の研究：英語認識の改善のために』が本年10月、開拓社より出版されました。八木先生がBNCに基づいた学習辞典『ユースプログレッシブ英和辞典』(2004年小学館刊)の編集主幹であり、数多くの辞書に深いかかわりをお持ちであること、さらに、語法文法学会の会長として英語の実証的な研究の牽引力としてご活躍であることや、精力的にその研究成果をご発表であることなどは、すでに我々には衆知の事実ですが、本書はその八木先生の辞書批評の最新の成果をまとめたものです。

本書は大きく分けて3章までの理論編とそれ以降の具体的な事例を取り上げた考察編に分けられます。理論編では第1章で英語辞書学の諸問題、とりわけ何ゆえ辞書の問題を考えるのかという根本的な問題を取り上げ、第2章で英語辞書の歴史を辿り、第3章では日本の辞書に大きな影響を与えたOED、CODを取り上げ、特にCODの初版の影響で古い記述が残っていることを明らかにしています。

第4章以下は、著者が小学館ホームページ『ランゲージワールド』の「語法の鉄人」の連載記事をまとめたものです。第4章ではすでに古くなった語義、第5章では古くなった成句、第6章では語義の変化に伴う動詞の統語構造の変化、第7章では同じく形容詞の統語構造の変化を扱っています。以上は古くなったものについての考察ですが、第8章では新たな語義を獲得した結果、新たな統語構造を持つようになった例を、第9章では辞書における英文法についての記述がしばしば誤解に満ちていることを指摘しています。特に小生が興味を覚えたのは、第8章のいわゆる phraseology の重要性を論じた「13. forget/forget about it の成句的意味展開」です。forget about it と forget it において、前者は特別な意味を生み出していないのに対して、後者は phraseology として多様な意味・用法を発展させていることが、BNC と Larry King Live Corpus その他のデータを用いて詳細に分析されています。これはほんの一例ですが、本書は、数多くの辞書の用例、記述を引用しつつ、コーパスから得られる情報と組み合わせながら新しい辞書のあり方を問う、まさに実証的、経験的な語法研究の典型的な成果だと思えます。

辞書の批評は、往々にして新語や新しい語義がどれほど収録されているかを基準に行われますが、著者が主張するように「今までの記述上の不備がどれほど修正されたか、古い語彙・語義・用法がどれほど排除されたか、という点」(「はじめに」より)から、地道に一つ一つの語・語義・用法を検証する必要があります。長年にわたり続けてこられた八木先生の検証作業は、日本の英和辞書発展に多大な貢献をしております。

本書は、英語分析を通して新しい辞書のあり方を問う辞書学の視点からの著作というだけではなく、英語に対する問題意識を如何に高め、より深い理解にいたるかに、ひいてはより良い英語教育の実践にも深くかかわっていることは本書の副題「英語認識の改善のために」からも読み取れます。常に言語に関する Awareness を問題とする者にとって、示唆に富んだ好著です。是非一読されることをお勧めします。(B5 版 309 頁 / 定価 3,400 円(外税) / ISBN 4-7589-2130-X)

次にご紹介するのは『ウィズダム英和辞典(第2版)』です。「英語のいま(現在)を映し出す最先端のコーパスを全面的に利用した初の英和辞典、次世代型英和!」をキャッチフレーズに、会員の井上永幸先生(徳島大学)と赤野一郎先生(京都外国語大学)を編者に初版が発行されたのは、ご承知のように2002年末でしたが、4年も経ないうちに、その第2版が送られてきました(2007年1月刊行予定)。初版ではなく第2版をこのコラムで紹介するのはいくつか理由があります。まず初版ではコーパスを利用したことを標榜しながらもその内容についての言及がほとんどありませんでした。今回は「三省堂コーパス」の概要がある程度明らかになっています。自前のコーパスを編纂すること自体大変で、COBUILDのThe Bank of Englishにも見られるように終わりの無い作業です。また、著作権などに関する複雑な諸般の事情もあり、全てを明らかにすることは困難かとも思われますが、自分の辞書がどのようなコーパスに基づいているのかは利用者にとっては非常に重要な情報だと思いますので、今後ともより詳しい情報提供を期待したいものです。

「コーパス分析をさらに深化! 英語の現在を鋭く映す」というコピーにも表されているように、第2版では、より充実したコーパスに基づき頻度表示や、頻度順の語義配列にも改訂がなされているほか、重要語に関してはその記述も大幅に改訂されています。従来の語法や類義語に関する囲みや“!”で示される注記に加えて、頻度情報やコロケーション情報を扱う「コーパス頻度ランク」や「コーパスの窓」などの新しい囲みも登場、その他、特定のジャンルや分野に関する「関連」、歴史・文化などの背景理解に役立つ「事情」などの囲みも大幅に増えています。従来からある誤文訂正に加えて、「作文のポイント」「読解のポイント」なども付加され、学習辞典としての情報が全体として豊富になっています。その分、活字が小さくなったことは仕方の無い事情でしょうか。

ここで、たまたま目にした改訂の例をご紹介します。小生の趣味はペーパーバックの濫読ですが、T. Clancy, M. Chrichton, J. Grishamなどの新作が出ないので、ふと手にしたNelson Demilleに最近は凝っています。皮肉たっぷりにベトナム戦争や、アメリカの諜報機関を扱ったサスペンスものが大半ですが、最近の作品には俗語、

卑語、「けなして」などのラベルがつく“crap”が相当頻繁に目につきます。他の作家の作品ではそれほど目にしないので、彼独特の語り口かも分かりません。そこで『ウィズダム(初版)』を見ると、頻度表示はランク外(E)、語義は名詞として3つ、形容詞、動詞として1つずつ、名詞に句用例が2つ、文用例が1つ、全体で7行の扱いでした。語法注記はありません。これが、第2版ではCランクに格上げ、間投詞としての記述が加わっています。名詞としての語義は3つで、同じですが、句用例が4つに、文用例も3つに増え、語法注記が名詞に3つ、間投詞に1つ、動詞に1つ加えられ、全体として23行のスペースが与えられています。この語の多用はDemilleの個人的な傾向ではないことがこのことから分かります。このように重要語に関しては、初版と比べると相当改訂されていることが分かります。当然、重要語からランク外に落ちた語もあるでしょうが、コーパスを利用した辞書の編纂のメリットの一つは改訂のスピードにあると思われます。勿論、コーパスそのものが最新のものとなっている必要があるのは当然ですが。

とまれ、コーパスを駆使した本格的な辞書として出発した『ウィズダム』が、さらに飛躍を遂げようとしている意気込みが伝わってくる第2版です。これも是非、手にとって見られることをお勧めします。(B6変形版2125頁/定価3,300円(外税)/ISBN 4-385-10569-3)

今回は期せずして、辞書に関する研究書とコーパスを利用した辞書そのものを紹介いたしました。いずれも、本学会のメンバーによる素晴らしい業績です。本学会がそれなりに目的を果たし、貢献していることの証でしょう。

